

回胴倒錯者

— PACHISLO FREAK —

再会

2003年春、スロット界にはこれといったヒット機種はなく、少々盛り上がり欠けていた。強いていえば、「旋風の用心棒(ロデオ)」か「アントニオ猪木」という名のパチスロ機(平和オリンピア)が人気機種だったといえる。個人的にはほとんど打ったことはなく、また打ちたいともあまり思わなかった。なので、スロット店に行くことも少なくなり、新しい趣味を探そうという人などを、ふらりと散策することが多くなっていた。

その日はなぜか家電量販店にきていた。インターネットの急激な普及により、パソコンコーナーには多種多様なそれが所狭しと陳列されている。その一角にはインターネット体験コーナーがあり、私も少しやつてみる。もちろん漫画喫茶や友人宅で時折使用していたので、全く違和感はなく、使用方法もよく知っていたのだが、このときは少し調べたいものがあったのである。それはスロットの設置機種情報だ。まさか今頃コンドルなんかいないだろうと思いつながら「クランキーコンドル」の検索をしている。そして数件ヒット！さらに、愛知県という比較的近場にも設置されている様子。

私「あ、もしもし、元気？コンドル打ちに行くぞ」

W「え？コンドル？新しいコンドル出たん？」

私「いや、クランキーやぞ」

W「マジ？まだあの？」

私「あるらしい、愛知に。行くやろ？」

W「行く行く！明日行こう！」

すかさずWさんに電話をしていた。Wさんも東京の大学を卒業して、三重に帰ってきたのである。もちろん勝つつもりなどなく、ただコンドルが打ちたい！そう思っただけだった。その夜はまぶたの裏に青い7が上段にテンパイしているさまが張り付き、なかなか寝付けなかった。

当日は当たり前のように寝不足で、眼目を擦りながら朝7時に起床。Wさんを迎えに行き、愛知に向かって出発したのである。スロット生活を辞めてからの就職先は地図を頻繁に使用する仕事であり、限られた時間内に目的地に到着しなければいけないと言う事が多く(運転手ではない。どんな仕事かは機会があれば発表)、見ず知らずの土地に行くのもお手の物であった。おかげで何の迷いも不安もなく、道中を邁進することができたのだ。

目的の店に到着したのは予定通りの9時丁度。そこには昭和を彷彿とさせるレトロ調の建物があった。出入り口付近には初老のおじさんがホウキで掃除をしている。中に入ってみると昔ながらの木製の床に、オレンジ色の椅子。そして誰もおらず、音楽すら流れていない。あれ？今日は休み？ふとそう思つて2人は顔を見合わせる。いったん外に出て掃除中のおじさんに聞いてみる。

「今日はお休みですか？」

「いえ、営業中ですよ」

「いや、店内の音楽も流れていなかった

ものですか。」「
「あ！忘れてました、今から流してきます」

べつに音楽はどうでも良かったのだが、とりあえず営業中で「安心だった」。

あらためてホール内に入り店内を散策する。台数は少ないけれど、機種がかなり多い。そして「昔前の機種ばかり！外観どおりの内部に時を遡った感覚すら覚えるほどだった。もちろんその一角にはあの「コンドル」が設置されている。スロットの面白さや、難しさ、そして攻略要素、私のスロットの基盤を確立してくれたコンドル、多数の人達の人生を狂わせたコンドル、誰もが認めたその名機の主人公は今もなお、青いパネルの中からこちらをジロリと覗んでいる。私もWさんも暫く立ち尽くしていた。きつとそれは2、3秒だったに違いない、しかしその時間が妙に長く感じられたのは、二人ともたくさん思い出が頭の中を駆け巡っていたからだろう。そんな思いにふけりながら2人は適当に並んで着席したのだ。

いざ遊技開始だ！変わらぬメダル投入音、変わらぬストップ音、その音が懐かしさを倍増させる。私は心の中で問うていた。(昔と比べてどう？上手くなった？早くなった？)それに答えるように台も反応してくれた。上段に青い7がテンパイしたのだ。「あつ：」その声に反応したWさんもこつちを見る、そしてお互いを見る。目が合つて間もなく妙に笑えてくる。それはお互いが「一緒の思い出だったこと」に気づいた瞬間でもあった。昔は緊張したりブレイハズしものにも緊張することなくおこなえる。それは技術が上達し

たからではない。「勝つ」ために打っているわけではないからだ。純粋に楽しむのがこれ程楽しいものだとは思わなかった。コンドルはまた一つ新しいスロットを教えてくれたのだ。

夢中で打ち続けていた為、どれくらいの時間が経過していたかは分からないが、手持ちのメダルが丁度なくなつたとき、2人は敬意と共にコンドルに別れを告げた。

新台

その店にはもう一つ気になる機種があった。それは新台のフタが刺さっていた「ギンギン丸」である。今頃ギンギン丸が新台？そう思つて気になつていたのである。せつかくの新台だし、誰もいないしちよと打ってみようとWさんに告げ、再び並んで遊技が開始された。この機種は前にも説明したので詳細は省くが、右押し時の小役ハズレが非常にクセになる機種

苦言

ホールにおいて従業員という存在はなくてはならないものです。台の清掃はもちろんホール内の清掃や玉・メダル運び、台の簡単なエラー対応や目押しなど、数々のことをおこないます。お客様が快適に遊技するためにできる範囲のサービスをとおこなうのです。それらの内容は店舗によってもまちまちですが、概ねよく似たかんじではないでしょうか。

私がパチンコ店に通いだした頃は男性従業員が多く、さらに今と比べると年配の方が多かったように思います。そして今のようなサービスはほとんどなく、それどころか従業員がホール内でタバコを吸う姿もあるほどでした。私はそれはそれでよかったのですが、いったいつ頃から現在のようになつたのでしょうか。そしてこの現在のサービスの中にも疑問を感じる事が時折あるのです。

各店舗はサービスを競いあい、そのサービス内容はより良いものに変化していき

が、少し寂しい気はした。それにしてもよく当選する。連荘しまくる。だれもお客様がこないのが不思議で仕方がない。2人ともドル箱を満タンにし、2箱目に突入していた。暇そうだったおじさんもメダル補給という仕事ができたらから、てきばきと動いてくれる。そして事件は起こった。これはスロットを13年打ち続けた

中でも唯一これだけの事件で、すごく損をした気分になる出来事だったのだ。：

次回予告

はたしてA氏とWさんが経験したスロットでの初体験は？そしてさらなる驚愕事実が発覚する！？乞うご期待！

ました。しかしそれに従業員がついてこれない状況が発生しているのです。先日、某店で信じられない光景を目にしたので紹介します。問題の出来事は「マッハGO GOGO」で起こりました。ある初老の男性がボーナス終了後のチャンスゾーンで、押し順ナビが発生(ナビに従えばGOGOタイム突入)しました。そこで首をかしげながら呼び出しランプを押し、従業員を呼びました。暫くして現れた従業員は、有無を言わずに順押ししてリールを止め、リール上では10枚役が揃つてしまいい、GOGOタイムに突入することなく通常ゲームへ。その後、初老の男性になにやら話しかけ、その男性はウンウンとうなずき、従業員は去って行きまして。どんな会話があったかは分かりませんが、しかしその男性は納得していたのです。この男性がこの機種の特徴を良く知つていれば、納得するわけがありません。その従業員がどう思つてリールを止めたのかは分かりませんが、きつとこの従業員もこの機種の特徴を知らなかったのだと思います。しかしこのホールには「スロット

で解らないことがあれば従業員まで！」と書いてある張り紙も随所に見られます。これは矛盾であり、許されることではありません。このように掲示するのであれば、個々の従業員が最低限の知識を身につけるべきだと私は思います。私は新台が入ると必ずその台を研究します。私の場合は打ち方とか演出ではなく、レバーの交換方法や、リールの外し方、ボタンの押し方などの機械のメンテナンスにかかわる部分を最優先に研究します。これは、万が一お客様が遊技中に台が壊れたとき、素早く対応できるように予め勉強しておくという理由からです。冒頭に記載したことのみが仕事ではありません。仕事の中に分らないことを他人にまかせつくりにするのではなく、今度は分かるように聞いたリ、調べたりすることがとても大切なことなのです。それに対して役職の方は必ず答えられるように準備しておかなければいけません。この「知る」という行為に対して、最近はお金欲さがあまり見られないのです。

A氏プロフィール

三重県出身。三重の高校を卒業後、進学のため大阪へ。学業よりもパチスロに専念してしまいお決まりコースの大学中退。中退後3年間はパチスロで生計を立てる。その後サラリーマンになるも副収入はパチスロで。結婚のため三重に戻りホール店員となる。現在では知識と経験を生かし某店で設定師として手腕を振るっている。目押しレベルはスイカの種まで直視できるほどの異常っぷり。